

# 論文の和文要旨

論文題目 : La variation sociolinguistique chez les francophones natifs et les apprenants japonophones du français : La réalisation de la particule négative ne n'

(フランス語母語話者と日本人フランス語学習者における社会言語学的変異 : 否定辞の *ne/n'* の省略)

氏名 : BARCAT Corentin Jean

本研究は、フランス語母語話者コーパス 5 つと日本人フランス語学習者コーパス 1 つを用いて、フランス語の否定辞 *ne/n'* の省略を分析した。このテーマを選んだのは、いくつかの重要な点がまだ取り組まれていないと考えたからである。このテーマに関する本研究の新規性は大きく 3 つある。1 つ目は、大量のトークンを対象に調査を行ったこと (母語話者では 20,000 トークン以上、学習者では 3,500 トークン以上)。2 つ目は、*ne* と *n'* を区別して分析したこと。3 つ目はシュワーを伴って発音される *ne* と伴わずに発音される *ne* の違いを考慮した分析を行ったことである。

まず、「ESLO2 Entretiens」と「PFC」という (フランスの) フランス語母語話者の 2 つの大規模コーパスを分析した。

結果は非常に近く、*ne* の省略率は 89,2% (ESLO2 Entretiens) と 86,3% (PFC)、*n'* の省略率は 90,5% と 87,7% であった。つまり話し言葉フランス語では、かなりフォーマルな状況においても、*ne/n'* は圧倒的に省略されている。どちらのコーパスでも、シュワーを伴う *ne* の維持よりも、シュワーを伴わない *ne* の維持の方が頻度が高い。これは本調査で明らかになった新たな知見である。

先行研究で指摘されているように、ne の省略率は代名詞が主語の場合では非常に高く（約 90%）、他の種類の主語の場合では非常に低い。

高頻度に出現する否定連辞（主語 + （+代名詞） + 動詞）では、ne/n'の左側の環境において（ne/n'以外の）多くの音の脱落が可能で、規範的な発音は稀であることもわかった。非常に頻度の高い 10 個の否定連辞（c'est、c'était、j'étais、je savais、je sais、je suis、il y a、il y avait、il y en a、il faut）に関して、コーパスではわずか 0.3%と 1.0%しか規範的な発音が見つからなかった。C'est、c'était、il y a は、非常に頻度の高い否定連辞で、ほぼ 100%の n'の省略率をもたらし、n'の総合省略率を高めている。全体的な結果では、ne と n'に違いはないように見えるが、この 3 つのチャンクを除いて、省略率は常に n'の方が数ポイント低い。この 3 つ以外の否定連辞は、同じ主語のタイプの連辞を比較した場合、頻度が ne/n'の省略率にわずかな影響しか与えていないことが分かった。

2 つ目の否定辞については、personne のように、主語（左位置）か目的語（右位置）に置かれる可能性があるものの位置を考慮することが重要であることがわかった。左の位置では n'/ne の省略率が非常に低い。

また、話者の言語外的要因も分析した。話者間の社会的な特徴は、ne/n'の省略率にほとんど違いをもたらさないことが調査から明らかになった。ESLO2 Entretiens と PFC では、否定辞の省略・維持において、個人差はあるが、社会的特徴の影響はそれほど大きくない。大多数の話者で否定辞の省略率は非常に高く、省略率が 50%以下の話者を見つけることはほとんど不可能である。

省略率が最も高いのは若い話者である。しかし、年配の話者は省略率がかならずしも低いわけではない。性別の影響はあまり見られなかった。学歴と職業については、多少の違いはあるものの、はっきりとした傾向は観察されなかった。

第 3 章の第 2 節では、発話の状況（フォーマル・インフォーマル）による影響を確認するために、200~400 トークン程度の小規模なコーパスを 3 つ分析した。最初のコーパスは、友人や家族と一緒に話している場面である。2 つ目は、6 人の政治家がテレビのインタビューを受けている場面である。3 つ目は、同じ 6 人の政治家が演説を朗読している場面である。結果は非常に明確で、状況（フォーマル・インフォーマル）が非常に重要な要因であることが明らかになった。友人や家族との会話では、ne/n'の維持はほとんど見られない。政治家のインタビューでは、ne/n'の省略が多い（30~40%）が、シュワーのない ne の発音も多い。朗読になると、ne/n'の省略はほとんど見られないが、シュワーのない ne の発音が多く見られる（20~40%）。これらの結果は、フランス語の自然な話し言葉では、非常にフォーマルな場面でも ne/n' の省略があることを示している。しかし、朗読の場合、ne/n'はほとんどいつも維持される。そしてシュワーのない ne はフォーマルな発音のマーカーであることも分かった。

第4章では、「ESLO2 Entretiens」や「PFC」とよく似た状況で、日本人のフランス語話者における *n'/ne* の省略を分析した。省略率は55%であった。予想通り、これはフランス語母語話者より低い。しかし、それでもフランス語学習者を対象とした多くの研究と比べると省略率が高い。また、日本人学習者はフランス語母語話者よりもシュワーのない *ne* を多く使っているが、これは予想外の結果であった。

フランス語母語話者の *ne/n'* の省略・維持において役割を果たす言語的要因のほとんどは、学習者にとっても同じ方向で役割を果たすが、その効果は学習者の方が大きい。例えば、省略率を低くする要因の場合、母語話者と比較すると学習者の省略率の方が2倍、3倍、4倍低くなる。

しかし、言語内的要因に関して、いくつかの違いを指摘することができる。学習者にとって、否定連辞の頻度は非常に重要であるようで、連辞の頻度が低い場合、省略率は非常に低くなる。学習者は母語話者と同様に *c'est* と *c'était* の省略率は非常に高いが、*ilya* と *ilyavait* の省略率は平均より低い。母語話者の場合、*ilya* や *ilyavait* は非常に高い省略率を伴う連辞である。フランス語母語話者とのもう一つの違いは、2つ目の否定辞が *pas* 以外の場合、学習者の *ne/n'* の省略率が高くなることである。

学習者の学習経験が *ne/n'* の省略に与える影響は特に興味深い。学習経験（3年未満）やフランス語のレベル（B2未満）が低いほど、省略率は低くなる。しかし、それ以上の経験・レベルでは、経験・レベルが増えても省略率はもう増加しないようである。

本調査では、留学の経験が特に重要であることが確認できた。留学前と留学後に調査に参加した学習者では、平均して省略率が2倍以上になった。また、2回録音された学習者のうち、その間に留学経験がない学習者については、省略率は変わらなかったか、低下した。これらの結果から、学習者の社会言語学的能力の育成には、母語話者のフランス語に触れることが非常に重要であることが確認された。